

テムル家とチンギス家

川口琢司

はじめに

1370年にテムル *Timür* がマー・ワラー・アンナフルに政権を樹立したとき、周辺にはモンゴル系の諸勢力が健在であった。北方の草原地帯のジョチ・ウルスと東方のモグーリスターンのチャガタイ・ウルスが政治的な混乱を経て再編され、ホラズムではスーフィー朝コンギラト族がジョチ・ウルスからの自立を達成していた。こうした情勢から、テムル朝史は初めから周辺のモンゴル系諸勢力との関係のなかで展開することになった。実際、テムルは政権樹立から西アジア征服を開始する1380年までの10年間にモグーリスターンに5回、ホラズムに4回遠征をおこなっている。その後も、テムルはスーフィー朝を滅ぼしたのをはじめ、モグーリスターン、キプチャク草原にも遠征したが、その一方でチンギス家を中心とするこれら周辺勢力と婚姻を通じて友好関係をきずくことも忘れなかった。

従来、テムル家とチンギス家との姻戚関係を扱った専論は見られないようである。しかし、テムルとその子孫の妻妾たちにも言及したバルトリド *B. V. Бартольд* の研究 [*Бартольд 1964a*] をはじめ、テムルをめぐる著名な女性たちを扱った *N. Togan* や *K. Jahn* の研究 [*Togan 1973*] [*Jahn 1974*]、チンギス家との関わりに注目してテムルの「ハーンの代理人としての立場」と「ハーン家の女婿としての立場」を指摘した問野英二の研究 [*問野 1976*]、MA のテムル朝王族の妻妾たちを復元し、テムル一族とチンギス家との姻戚関係に留意しつつテムルの後継問題をも論じた近年の *J. E. Woods* の研究 [*Woods 1984, 1990a, 1990b*] など、この問題について重要な指摘を含む研究成果が存在する。そこで本稿では、これら諸先学の成果をふまえながら、チャガタイ・アミールたちとチンギス家との関わり、テムル家とチンギス家との姻戚関係の展開、それがテムルの後継問題にあたえた影響の3点について考察を進めることにする。

I チャガタイ・アミールたちとチンギス家

1 14世紀後半のチャガタイ・ウルスのハンたち

A. H. 747 (1346) 年、マー・ワラー・アンナフルではチャガタイ・ウルスの実質的な権力を握る最後のハン、ガザン *Gāzān* (在位 1341-46) が麾下のアミール・カザガン *Qazāgan* の反乱

により殺害されると、ウルスの統治権はチンギス家からチャガタイ・アミールとよばれる遊牧集団の統率者たちの手に移った。この状況は、モグーリスターンのハンが支配した一時期を除けば、テムル朝の成立に至るまで変わることはなかった。しかし、チンギス家はウルスの実質的な支配権を失ったものの、その権威を依然として維持し続けた。それは実権を掌握したチャガタイ・アミールたちがチンギス家の人物をハンに即位させたり、あるいはチンギス家の女性と結婚して姻戚関係を結んだ事実によく現われている。

チャガタイ・アミールと統治年代	出自と麾下の集団	チャガタイ・ウルスのハンと在位年	ハンの系統	ハンの死因
Qazağan (1346-58)	Tubayt 族 Qaraūnās 集団を率いる	1. Dānišmandča (1346-48) 2. Buyān Qulī (1348-58)	オゴデイ系(マリク系) チャガタイ系(ドゥアの孫)	Qazağan による殺害 ‘Abdallāh による殺害
‘Abdallāh b. Qazağan (1358-59)	Tubayt 族 Qaraūnās を率いる	3. Timūrśāh (1358-59)	チャガタイ系(イエスン・テムル系)	Bayān Sūldūz と Hāggī Barlās による殺害
Bayān (1359-60)	Sūldūz 族			
Husayn b. Mušallā b. Qazağan (1364-69)	Tubayt 族 Qaraūnās を率いる	4. Kābulśāh (1364-66) 5. Hubba (1366) 6. ‘Adil Sultān (1366-69)	チャガタイ系(エルジギデイ系) 不明 チャガタイ系(コンチュク系)	Husayn による殺害 Husayn による殺害 Timūr による殺害
Timūr (1370-1405)	Barlās 族	7. Suyūrgatmiš (1369-88) 8. Sultān Mahmūd (1388-1402)	オゴデイ系(1の息子) オゴデイ系(7の息子)	病死 病死

表 1

表 1 は14世紀後半にチャガタイ・ウルスを統治したチャガタイ・アミールとかれらによりウルスのハンに擁立された人物に関するものである。1360年から1364年まではモグーリスターンのチャガタイ系トゥグルク・テムル・ハン Tuǧluq Timūr とその息子イルヤース・ホージャ Ilyās Xwāga がマー・ワラー・アンナフルを征服・統治した。表 1 からわかるように、20年近くチャガタイ・ウルスに君臨したカザガン一族は、一例を除いて、すべてチャガタイ系の人物をハンに即位させた。唯一の例外として、カザガンはガザンとの対立のなかでオコデイ系ダーニシュマンドチャ Dānišmandča を即位させたが、その理由は短期間に適当なチャガタイ系の人物を見出せないことにあった[Tauer : 7]。ところが、

マー・ワラー・アンナフルとその周辺のウルスは昔からチャガタイ・ハンとかれの子孫に属していた。アミールたちの多くはダーニシュマンドチャの王権 (salṭanat) をかれがチャガタイ一門の出身でないという理由で嫌っていた。[Tauer : 9]

とあるように、チャガタイ・アミールたちはオゴデイ系の人物がチャガタイ・ウルスに君臨することに不満を抱いていた¹⁾。まもなく、カザガンはこの不満に起因するアミールたちの騒乱を未然に防ぐためダーニシュマンドチャを廃し、チャガタイ系ブヤン・クリ Buyān Qulī をハンに即位させた。このような経過から、カザガンによるオゴデイ一門の擁立は例外的な事例と見るべきであり、むしろ多くのチャガタイ・アミールはチャガタイ系のハンがチャガタイ・ウルスを支配すべきであるという理念を共有していたといえる。

ハンの死因を見ると、テムル朝の成立までに即位したハンは全員殺害された。しかし、ハン殺しは時として大きな抵抗を招いた。たとえば、カザガンの息子アブドッラー ‘Abdallāh が賢明・公正なブヤン・クリ・ハンをさしたる理由もなく殺害すると、チャガタイ・アミールたちはこれに強く反発し、かえってアブドッラーとかれが擁立したテムルシャー Timürsāh を反逆者として殺害した[ZNS : 15]。ハンたちは基本的には国事への関与を許されない名目的な存在であったが、この例のようにかれらを理由なく廃することはアミールたちの権力の喪失につながりかねなかった²⁾。

テムルはフサイン Ḥusayn が擁立したチャガタイ系アーディル・スルターン ‘Ādil Sulṭān を処刑し、カザガンが廃位したオゴデイ系ダーニシュマンドチャの息子ソユルガトムシュ Suyūrgatmis を即位させた。ソユルガトムシュはテムルとフサインとの抗争(1366-8, 69-70)の初期からテムル配下にあり[ZNS : 38, ZNY : 118a], フサインに勝利する直前の1369年テムルよりハンに推薦された[ZNY : 137a]。ここにはオゴデイ系の人物をハンに擁立して従来のチャガタイ一門によるウルス支配の理念を否定するテムルの革新的な意図を読みとることができるように思われる。1388年ソユルガトムシュはテムルに同行してホラズムへ向かう(第5次ホラズム遠征)途上ブハラで病死した[ZNS : 110, ZNY : 197b]。テムルはホラズム遠征から帰還すると、ソユルガトムシュの息子スルターン・マフムード Sulṭān Maḥmūd をハンに即位させた[ZNS : 111, ZNY : 197b]³⁾。その後、7年戦役(1399-1404)中の1402年9月ごろ、スルターン・マフムード・ハンはアナトリア遠征の途上病没した[ZNY : 420a, MTM : 130]。テムルはその死を悲しんだが、もはやハンを擁立することはなかった⁴⁾。

カザガン一族が多くの子孫を殺害したのとは対照的に、テムルはソユルガトムシュ、スルターン・マフムード父子を厚遇した。シャーミーは1章をもうけてスルターン・マフムードのハン位継承を記すが、冒頭に次のような記述が見られる。

(テムルは貴顕や柱国たちと協議し)国事の処理と時代の状況の利益に関する熟慮の末に次のように一致した。国にとって帝王(pādsāh)(=ハン)は不可欠である。なぜなら、帝王の地位は、兵士との関連で言えば、胴体が首なしでは役に立たないように、胴体と連関した首の地位である。臣下は帝王なしではやってゆけない。[ZNS : 111]

これによれば、ハンは軍事上不可欠な存在であったことがわかる⁵⁾。実際、父子はしばしばテムルの軍事遠征に随行し、万人隊を指揮するほどであった[ZNY-T : 251, ZNY : 203b]。かれらもよくテムルの期待にこたえ、とりわけスルターン・マフムードは7年戦役中のアナトリア遠征でオスマン朝のバヤズィド1世を捕虜にするという大功をたてた[ZNY : 413a, MTM : 114-5]。加えて、テムルはソユルガトムシュ一族と姻戚関係をもきずいていた。

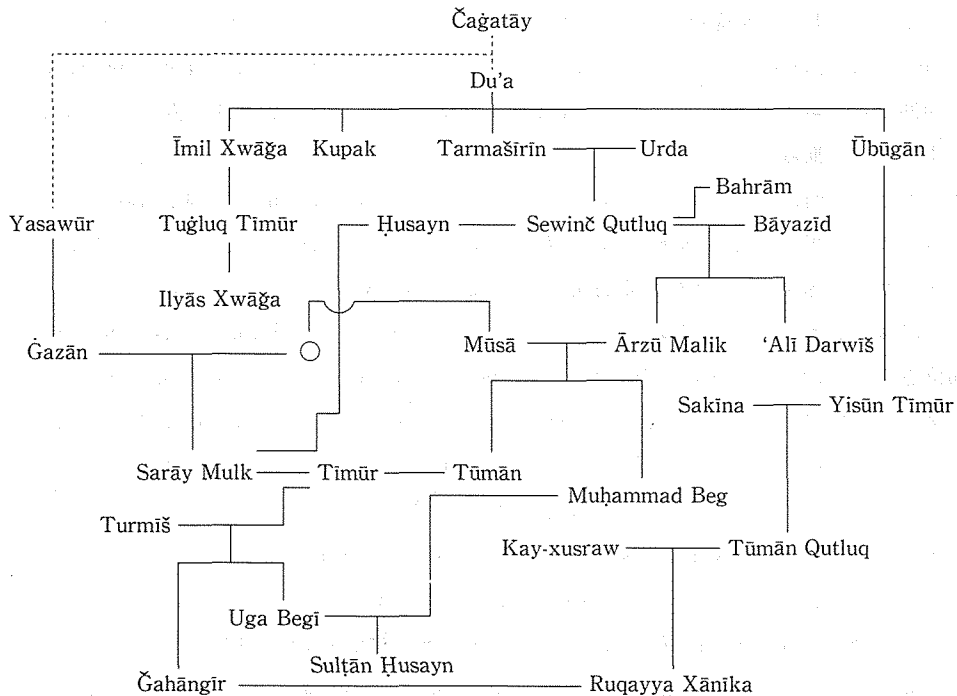
スルターン・ガズイー陛下(=テムル)は、かれ(=スルターン・マフムード)の父(=ソユルガトムシュ)の権利を尊重するため、自分の孫の一人をかれと結婚させ、父の代わりにハン位につけた。[MTM : 130]

これによれば、テムルはスルターン・マフムード即位の際にかれに孫娘をめとらせた。孫

娘とはサアードト・スルターン Sa'adat Sultān b. 'Umar Šayx (またはスルターン・ベギ Sultān Begi) のことである [MA : 102a, MTM : 114]。その一方で、ソユルガトムシュとスルターン・マフムードの娘たちはそれぞれテムルの第3子アミーラーンシャー Amīrānsāh とテムルの孫ウルグ・ベグ b. シャールフ Ūluġ Beg に降嫁していた (系譜 2)。

2 チャガタイ・アミールたちとチンギス家との姻戚関係

次に、1370年テムルが政権を掌握するまでに成立した、チャガタイ・アミールとチンギス家との姻戚関係について考察する (系譜 1)。まず、タルマシリン・ハン Tarmašīrin (在位



系譜 1

1326-34) とオルダ・ハトン Urda とのあいだに生まれたセウインチ・クトルク Sewinč Qutluq なる女性をめぐる姻戚関係に注目したい。この女性はバーヤズィード Bāyazīd, フサイン, バフラーム Bahrām の順に降嫁した。バーヤズィードはシル川中流域のホジャンド地方を本拠地とするジャライル族の統率者で、セウインチとのあいだにアールズー・マリク Ārzū Malik とアリー・ダルウィーシュ 'Alī Darwiš をもうけた [ZNY : 114b, cf. Manz 1989 : 51, 158]。1360年バーヤズィードがモグーリスターンのトゥグルク・テムル・ハンにより殺害されると、1366年までに息子アリー・ダルウィーシュがジャライル族の統率者となった [川口 1988 : 91]。1366年トハーリスターンを本拠地とするカラウナス族の統率者フサインがついにマー・ワラー・アンナフルの実権を掌握し、セウインチと結婚した [ZNY : 114b, cf. Manz 1989 : 158]。同年アリー・ダルウィーシュはタイチウト族のムーサー Mūsā らとともにテム

ルとフサインを対立させる陰謀を企てたかどでテムル軍に攻められホジャンドから逃走、代わってテムル麾下の同族バフラームがジャライル族の統率者となったが、バフラームはまもなくテムルにそむいてモゲーリスターンのイルヤース・ホージャ・ハンの麾下に入った[川口 1988 : 91-2]。1370年テムルはフサインに勝利してこれを殺害すると、フサインの正室からジャライル族と関わりの深いセウインチをバフラームに与え、ジャライル族の懐柔をはかった[ZNY : 139a, MA : 32a, cf. Manz 1989 : 57, 158-9]⁶⁾。

チャガタイ系イエスン・テムル・ハン Yisūn Tīmūr (在位 1338-39) の娘テュメン・クトルク Tūmān Qutluq はフッタラーンを本拠地とするバルラス族の統率者ケイ・ホスロウ Kayxusraw に降嫁した。1360年フサインがケイ・ホスロウの兄弟を殺害すると、ケイ・ホスロウはフサインを嫌って翌年トゥグルク・テムル・ハンの麾下に入り、シル川以北で活動するようになる。1367年ごろケイ・ホスロウはトゥグルク・テムルの好意でイエスン・テムルとサキーナ・ハトン Sakīna (またはビビ・トフティ Bibi Tuxti) とのあいだの娘テュメン・クトルクと結婚し、娘ルカイヤ Ruqayya をもうけた[ZNY : 126b, HS IV : 113, cf. Бартольд 1964a : 42]。トゥグルク・テムルはケイ・ホスロウを女婿(dāmād)のように尊重していたという。同年、フサインを共通の敵とするテムルとケイ・ホスロウは、同盟の証としてテムルの次子ジャハーンギール Ġahāngīr とルカイヤを結婚させ、姻戚関係を結んだ⁷⁾。

ガザン・ハンの娘のサライー・ムルク Sarāy Mulk はフサイン、テムルの順に降嫁した。父ガザンがカザガンに弑逆されたとき5歳または10歳だったという[Tauer : 9, MS-T : 215]。1370年テムルはフサインを殺害すると、サライー・ムルクを正室として迎えた[ZNY : 139a, MA : 96b, cf. Бартольд 1964a : 47]。サライー・ムルクのおじがタイチウト族の統率者ムーサーである。姉妹がガザンに嫁いだため、ムーサーはガザンの義兄弟となった[ZNY : 145b]。高位のアミール (amīr-i mu'tabar) にして、チャガタイ・アミールの最有力者 (mu'azzamtārīn-i umarā'-yi Ġagatāy) であった[ZNS : 47, ZNY : 119a, MTM : 265]。また、(テムルの) 郷土のアミール (amīr-i wilāyat) [ZNS : 24], あるいはナフシャブのアミール (amīr Naxsab) やハーキム (hākīm) [AM : 51, 466, cf. Jahn 1974 : 527] とよばれる。1366年テムル軍との戦いに備え、ムーサーはカルシ周辺から6~7千騎も集めたが[Ando 1992 : 61], これもムーサーとカルシとの関わりをうかがわせる。これらの史料から、ムーサーの本拠地はテムルが属したバルラス族の本拠地カシュカ・ダリヤ流域、とりわけナフシャブ⁸⁾ やカルシを中心とするカシュカ・ダリヤ下流地方に限定してよからう。ところで、キョペキ・ハン (在位 1318-26) はナフシャブから2ファルサフ (約12km) の地に宮殿を建設し、そこからこの地はカルシ (モンゴル語で「宮殿」の意) とよばれるようになったという[ZNY : 113b, cf. Le Strange 1905 : 470]。イブン・バットウータはナフシャブからタルマシリン・ハンの本営に1日かけて達しているから[IB : 28-29], タルマシリンもナフシャブから遠からぬ地に幕営を設けていたことがわかる。ガザン・ハンもカルシから2日行程の地に Zangīr Sarāy とよばれる自身の宮殿を有した[ZNY : 153a, 281b]。このように、14世紀前半の3人の著名なチャガタイ・

ハンはいずれもナフシャブやカルシ付近に本拠地を有していた⁹⁾。

ムーサーはガンチ千人隊 (hazāra-yi gāngī) というきわめて興味深い集団を私有民 (xāṣṣa) として所有していた [ZNY : 129a, cf. Manz 1989 : 51]¹⁰⁾。ガンチとは「ハンの家畜番」を意味するモンゴル語であり [Doerfer 1963 : 415-416], ハンの畜群の世話をする私有民であった。したがって、ムーサーが所有するガンチ集団は、ムーサーとナフシャブ、カルシとの関わりや千人隊という規模の大きさを考慮するならば、カシュカ・ダリヤ下流地方を本拠地とするチャガタイ・ハンの私有民と想像されるのである。

ムーサーはタルマシリン・ハンの娘セウインチ・クトルクとジャライル族のバーヤズィードとのあいだに生まれたアールズー・マリク、すなわちハンの孫娘と結婚し [ZNY : 120b, cf. Manz 1989 : 51, 158], 息子ムハンマド・ベグ Muḥammad Beg と娘テュメン Tūmān¹¹⁾ (1366年生まれ) をもうけた。テュメンは1378年テムルの2番目の正室となった [ZNY : 120b, 162a, MA : 96b, ET : 187]¹²⁾。アールズー・マリクの母セウインチはバーヤズィードの死後フサインと結婚したため [ZNY : 114b, MA : 32a, cf. Manz 1989 : 51, 158], ムーサーとフサインとのあいだに姻戚関係が生じた。マンツが指摘するように、この姻戚関係は1360年代後半のムーサーとフサインとの密接な同盟関係の最大の要因になったといえよう [Manz 1989 : 51]。

ムーサーは仕えるべき主君をテムル→(1364-66)→フサイン→(1369)→テムル→(1370)→ゼンデ・ハシャム Zinda Ḥasam→(1372)→テムルと目まぐるしく変えた日和見的な人物であった。しかも、かれはテムルとフサインとの第一次抗争の原因となる陰謀の中心人物であったうえに、シャブルガーンのナイマン系アパルディー族の統率者ゼンデ・ハシャムを扇動して2度もテムルに反逆させた [川口 1988 : 104]。ところが、テムルは1372年ゼンデ・ハシャムらの反乱を未然に防止したあと、

至高なるゆりかごサライ・ムルク・ハヌムがアミール・ムーサーの姪であり、無垢と厳粛の貞節なヴェール、ウゲ・ベギ Uga Begī がかれ (=ムーサー) の息子と婚約していたので、サーヒブ・キラーン陛下 (=テムル) は「汝から明らかになっていた罪は大きい、余と汝とのあいだには姻戚関係 (paiwand) があるので、余はそれ (=罪) に赦免の文字を書き、復讐を放棄した」と言った。 [ZNY : 145b]

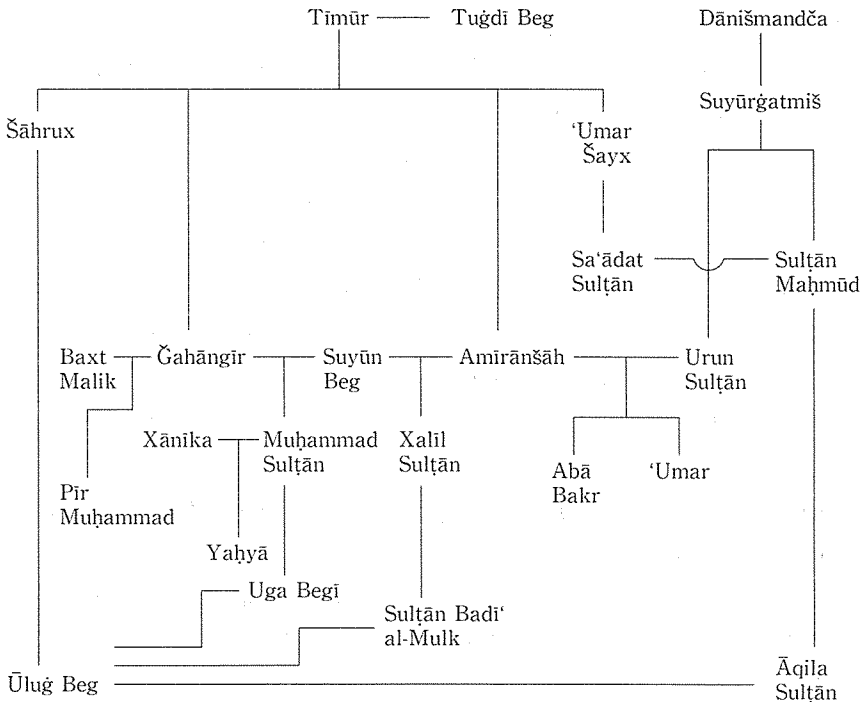
とあるように、姻戚関係を理由にムーサーのたび重なる反逆行為をゆるした。一つには、前述したように、ムーサーの姪で、ガザン・ハンの娘サライ・ムルクがテムルの正室となっていたためであり、他方ではテムルと正室トゥルミシュ Turmīs の娘ウゲ・ベギ、別名 Taḡiṣah (1381年没) が1369年ごろムーサーの息子ムハンマド・ベグと結婚していたからである [ZNY : 119a, 157b]¹³⁾。興味深いことに、MA はテムルの正室トゥルミシュがガンチ集団 (qāngiyān) の出身だったことを伝える [MA : 99b]。前述のように、ガンチはカシュカ・ダリヤ下流域を本拠地とするチャガタイ・ハンの私有民で、ムーサーの配下にあった。したがって、テムルはムーサーの娘テュメン、ムーサーの姪サライ・ムルク (チャガタイ系)、ムーサー配下のガンチ集団出身のトゥルミシュと、ムーサーにかかわりの深い3人の女性をめとり、ウゲ・ベギを

ムーサーの息子ムハンド・ベグに嫁がせたことになり、テムル家とムーサー一族との姻戚関係の強さがあらためてうかがわれるのである。

II テムル家とチンギス家諸裔との姻戚関係

1 オゴデイ系

テムルが擁立したオゴデイ系ソユルガトムシュ・ハンの娘オルン・スルターン Ūrūn Sultān がテムルの第3子アミーラーンシャーに、ソユルガトムシュの孫娘アーキラ・スルターン Āqila Sultān がテムルの孫ウルグ・ベグ b. シャールフにそれぞれ降嫁した[MA : 44a, 121b, 137 bis-b, cf. Бартольд 1964a : 99, 143] (系譜 2)。これにより、アミーラーンシャーとウルグ・ベグは「チンギス家の女婿」を意味する Kūragān (kürägān) なるトルコ語称号を帯びる資格を有し、史料中ではしばしばかれらの名前にこの称号が付される。アミーラーンシャーとオルン・スルターンとのあいだにはアバー・バクル Abā Bakr (1382年生まれ)、ウマル 'Umar (1383年生まれ)の2子、クトルク・スルターン Qutluq Sultān の1女が生まれた[MA : 122b, 123a]。一方、I で触れたように、ソユルガトムシュの息子スルターン・マフムード・ハンはテムルの庶長子ウマル・シャイフの娘サアードト・スルターンをめとり、ウマル・シャイフの義理の息子となった。このように、ハン家としてのオゴデイ系ソユルガトム



系譜 2

シュー族とテムル家は通婚関係にあった。

2 ジョチ系

まず、母方でジョチ・ウルスのハンに連なるためハンザーデ Xānzāda とよばれるソユン・ベグ Suyūn Beg¹¹⁾とテムル家との結びつきが注目される [Togan 1973 : 11-3] (系譜 2)。ソユン・ベグの父については、ホラズムに拠るコンギラト族出身のスーフィー朝ナングダイ Nangdāy¹⁵⁾一族のうち、アク・スーフィー Āq Šūfī とするもの [ZNS : 67, Tauer : 40, ZNY : 146a, 148a, MA : 113b, 114b, 126b] とフサイン・スーフィー Ḥusayn Šūfī [MA : 112b, 113b, MF : 207] とするものがある¹⁶⁾。母方の祖父についても、ウズ・ベグ・ハン Uz Beg (在位 1313-41) とするもの [ZNS : 67, Tauer : 40, ZNY : 148a, MA : 114b] とウズ・ベグの息子ジャニ・ベグ・ハン Ğānī Beg (在位 1342-57) とするもの [HN : 38ab, 32a, cf. Sertkaya 1979-80 : 250] がある。ソユン・ベグの母シェカル・ベグ Šikar Beg はウズ・ベグまたはジャニ・ベグの娘とされるが [ZNY : 148a, HN : 38a], 奇妙なことに、MA のジョチの子孫の系譜にその名が見えない。ソユン・ベグは1374年スーフィー朝とテムル政権との和平のためテムルの次子ジャハーンギールに降嫁した。シャーミーはその時の様子を次のように記す。

アミール・サーヒブ・キラーン(=テムル)は(ソユン・ベグを)尊重するため敬意を払った。カイドウ・ハン Qaydū の息子の嫁クルトガ・ハトン Qurtgā を彼女(=ソユン・ベグ)の出迎えに送った。ノヤンたち, カーズィーたち, ウラマーたち, 貴族たち, 高官たちが(ホラズム東南部の)カート Kāt まで出迎え, できるだけ十分な敬意を払って彼女をサマルカンドに連れてきた。(二人は)国の高官や名士たちでいっぱい集い(maglisī)でシャリーア(sar')にのっとって幸運にも結婚の契りを結んだ [ZNS : 68]

サマルカンドの高官・貴族その他がホラズムまでソユン・ベグをわざわざ出迎えに行ったことからからもわかるように、テムルはこの結婚を相当に重視していたようであり、スーフィー朝との和平とはまた別のものを期待していた印象さえ受ける。あるいは、それはソユン・ベグが母方を通じてもつチングス家の血統の獲得であったかもしれない。結婚の翌年、ブハラでソユン・ベグにムハンマド・スルターン Muḥammad Sulṭān が生まれた [ZNS : 276, ZNY : 156b, MA : 113b]。ところが、1376年ジャハーンギールが急死したため、寡婦(yingā)ソユン・ベグは1384年までにテムルの第3子アミーラーンシャーとレヴィレイト婚をおこなった [MA : 121b]。ソユン・ベグはアミーラーンシャーとのあいだに息子ハリール・スルターン Xalīl Sulṭān (1384年生まれ)と娘ベギ・スルターン Begī Sulṭān をもうけた [ZNS : 95, ZNY : 175a, MA : 122b-123a, 126b, ET : 178]。

しかし、後述する夫アミーラーンシャーの反乱のため、1399年ソユン・ベグはアゼルバイジャンからサマルカンドの義父テムルのもとに避難し [ZNY : 349b, Tauer : 148-9], 以後その宮廷で暮らすようになった。彼女はテムルの宮廷で大切に扱われたという [ET : 178]¹⁷⁾。1404年ソユン・ベグが催したウルグ・ベグとウゲ・ベギ(ソユン・ベグの孫)との結婚の祝宴

に招かれたクラヴィホはソユン・ベグの外見や様子を簡潔に伝える [ET : 176-8]¹⁹⁾。1402年テムルの第4子シャルフに息子ムハンマド・ジューキー Muḥammad Ğūkī が生まれると、ソユン・ベグがこれを養育することになった [ZNY : 402b, ZT : 153]。

ソユン・ベグの姉で、同じくハンザーデと呼ばれたのがトゥグディ・ベグ Tuğdı Beg である [Tauer : 92]。そのハンザーデという異名から、やはりナングダイの息子とシュカル・ベグとのあいだに生まれたと考えられる。トゥグディ・ベグはテムルに降嫁して正室となったが [MA : 96b], テムルとのあいだに子供をもうけることはなかったようである¹⁹⁾。

3 チャガタイ系

前述したように、テムル政権成立以前の1367年ごろテムルはフサインに対抗してフックラーン・バルラス族のケイ・ホスロウと同盟するため次子ジャハーンギールとケイ・ホスロウの娘ルカイヤを結婚させた。ルカイヤはイエスン・テムル・ハンの娘テュメン・クトルクとケイ・ホスロウとのあいだの娘で、母方を通じてチャガタイの血統を引く女性であった。

ガザン・ハンの娘サライ・ムルクは1370年テムル政権の成立にあたりテムルに降嫁してその正室となった [Togan 1973 : 5-8]。クラヴィホによれば、テムルの第一夫人は Caño とよばれ、大王妃や大皇妃 (la grand reyna o la grand enperadora), あるいは王妃や大夫人 (reyna o señora grande) を意味したという [ET : 152, 187]。ドミニコ派のスルターニーヤ大司教ジャンはテムルの第一夫人を Caron とよぶ [Moranvillé 1894 : 14]。Caño (Caron) は王妃を意味するトルコ語 xanim の音写であり [Jahn 1974 : 520, n. 14, 523], サライ・ムルクをさす。テムルに謁見したクラヴィホはサライ・ムルクの容姿・服装・装飾・従者などを詳細に記し [ET : 185-7], 公式の席での彼女の姿をあざやかに伝える²⁰⁾。テムルはサライ・ムルクとの結婚によりキュレゲンの地位を獲得すると、この称号を貨幣やフトバ, さらに国書において使用した [Бартольд 1964a : 48, 間野 1976 : 126]²¹⁾。サライ・ムルクは1384年アミーラーンシャーとソユン・ベグとのあいだに生まれたハリール・スルターン, 1400年ムハンマド・スルターンb. ジャハーンギールとチャガタイ系ハン・スルターンとのあいだに生まれたヤヒヤー Yahyā を養育した [Tauer : 54, MA : 115b]。バルトリドはウルグ・ベグもサライ・ムルクに養育された可能性がある指摘する [Бартольд 1964a : 64]。

1397年ごろ、サライ・ムルクはサマルカンドの北東門付近にマドラサを建設し [Golombek & Wilber 1988 : 254], のちに彼女の墓廟がこのマドラサに付設された。1399年テムルはマドラサの正面 [ZNY : 457b] にサライ・ムルクの母(ムーサーの姉妹)を記念するためモスク (通称ビビ・ハヌム・モスク) を建設した [ET : 202, Golombek & Wilber 1988 : 255-260]。1404年夏サライ・ムルクはテムルとともに7年戦役から戻り、サマルカンド郊外の Bāg-i Ćinār (すずかけの園) に降り立った [ZNY : 457a]。クラヴィホはこのバグを be-heginar とよび、サマルカンドを訪れたとき建設中で未完成だったと伝えるが [ET : 162], テムルはこのバグをサライ・ムルクのためにつくらせたものと思われる²²⁾。クラヴィホは

1404年秋ウルグ・ベグとウゲ・ベギとの結婚の祝宴のためサマルカンド北東郊外のカーネ・ゲル Kān-i gil 牧地に設営されたテムルの巨大なオールド(幕営)の様子を詳細に記述し[ET : 170-175], オールドには大天幕とそのまわりを囲む, 11のサラパラダ(calaparada)とよばれる囲い場があったと伝える。サラパラダ, すなわちサラー・パルデ(sarā-parda)はそのなかに多くの様々な形態の天幕を有し, テムルや妻たち, かれの子孫の妻たちが住む私的空間であり, そのうちの2つはテムルの第一夫人サライー・ムルクと以下に述べる正室テケル Tūkal のものであった[ET : 174]。

テケル(・ハーン・マリク Xānd Malik)はモゲーリスターンのヒズル・ホージャ・ハン Xidr Xwāga の娘で, 1397年テムルに降嫁してその正室となった[ZNS : 169-170, ZNY : 292ab, MA : 33b, 96b, cf. Togan 1973 : 8-10]。この結婚により, テムルはキュレゲンとしての立場を強化したといわれる[間野 1976 : 126]。結婚にあたり, テムルはテケルのためにクラヴィホが delycuxan とよぶ[ET : 162] Bāg-i Dilgusā(爽快な園)と3つの丸屋根つき宮殿をつくらせた[ZNY : 294a, 間野 1983 : 253]。クラヴィホによれば, 大夫人サライー・ムルクに対して, テケルは guichicano (küçük xanim) (小夫人)とよばれた[ET : 174, 187, cf. Бартольд 1964a : 58]。

マリカト Malikat はテムルの庶長子ウマル・シャイフに降嫁したが[MA : 100b], 5年戦役中の1394年クルディスターンで夫が戦死すると, テムルの第4子シャールフとレヴィレイト婚をおこなった[MA : 31b, 132b]。チャガタイ系のヒズル Xidr なる人物の娘で, ドウア・ハン Du'a (在位 1282-1307)の兄弟の末裔である[MA : 31b]²⁹⁾。マリカトはウマル・シャイフとのあいだに1379年ピール・ムハンマド Pīr Muḥammad, 1384年イスカンドル Iskandar, 1387年アフマド Aḥmad, 1393年バイカラ Bāyqarā [MA : 101b, ZNY : 491b], シャールフとのあいだに1399年ソユルガトムシユ Suyürgatmis をもうけた[MA : 148a, ZNY : 351a]。

ブヤン・クリ・ハンの孫娘であることからハニケ Xānika とよばれたハン・スルターン Xān Sultān なる女性はテムルの孫ムハンマド・スルターン b. ジャハーンギールに降嫁し [MA : 33a, 114b, ZNY : 429a, SH : 76a, ZT : 87]³⁰⁾, ヤヒヤーなる息子(1400年生まれ)とウゲ・ベギ(1419年没)なる娘をもうけた[MA : 115b, 118b, 116a]。1402年のアンカラの戦いの勝利宣言書(fath-nāma)には, Muḥammad Sultān Kūragān Bahādur なる表現が見られるから [Aka 1986 : 11-2], ムハンマド・スルターンはこの結婚を通じてテムルよりキュレゲンを称することを許されたものと思われる³¹⁾。母方を通じてチンギス家の血統を引くウゲ・ベギはテムルの命により1404年に10歳のウルグ・ベグ b. シャールフと結婚し, その最初の妻となった[SH : 14b-15a, ZT : 97, MA : 116a, 137bis-b, cf. ZNY : 461a, Бартольд 1964a : 66, 143]。

Ⅲ テムルの後継者問題

1 正室トゥルミシュの子孫たち

テムルの正室で男子をもうけた女性はムーサー配下のガンチ集団出身のトゥルミシュただ一人にすぎない³⁹⁾。テムルとトゥルミシュとのあいだに生まれた子女としては、ジャハーンギール、ジャハーンシャー Ġahānsāh の2子、ウゲ・ベギの1女がいるが、ジャハーンシャーは5歳で夭折した[MA : 99b, 100a]。テムルの嫡出の次子ジャハーンギールは1356年ブハラで生まれた⁴⁰⁾。カルト朝への使者としてヘラートにおもむくなど、すでにテムルの政権獲得の過程で活動が知られ[ZNS : 44, ZNY : 124a]、テムル政権成立後も1375年の第3次モゲーリスターン遠征⁴¹⁾やジャライル族の反乱鎮圧などに活躍した[ZNS : 69, ZNY : 151ab]。しかし、1376年テムルが第4次モゲーリスターン遠征を敢行しているあいだにサマルカンドで20歳の若さで病没した[ZNS : 73, ZNY : 156ab]。

I・IIで言及したように、ジャハーンギールは早くも1367年ごろチャガタイ系イエスン・テムル・ハンの孫娘ルカイヤと結婚した。続いて、1374年ジョチ系ウズ・ベグ・ハン(またはジャニ・ベグ・ハン)の孫娘ソユン・ベグと結婚し、翌年ムハンマド・スルターンをもうけた。これらの結婚からは、テムルが庶長子ウマル・シャイフより嫡出の次子ジャハーンギールを明らかに重視・優遇していた印象を受ける。というのも、ウマル・シャイフが初めて結婚した時期は1375年以降とジャハーンギールよりかなり遅く、しかも最初の結婚相手のマリカトはチャガタイ系ドゥア・ハンの兄弟の末裔にすぎなかったからである。

テムル朝第3世代のなかで、1375年に生まれたムハンマド・スルターンは、テムルの正室から生まれた父とチンギス家の血統を引く母をもつ唯一の男子であった。ジャハーンギールとソユン・ベグとのあいだの嫡長子で、テムルの尊敬する姉クトルク・テルケン Qutluq Tarkān⁴²⁾(1383年没)に養育された[MA : 114b]。IIで触れたように、ムハンマド・スルターンはチャガタイ系ブヤン・クリ・ハンの孫娘と結婚し、キュレゲンを称したことで知られる。また、テムルが全幅の信頼をおくほどの勇敢さの持ち主でもあった[ZNS : 256]。1390年代以降、テムルはこの孫を軍事の要職に抜擢するなどしてその信頼感を強めていった。ジョチ・ウルス遠征(1390-91)では、テムルは大中軍(qūl-i buzurg)とよばれる2軍構成の中軍を編成し、近衛軍である第二中軍の指揮をムハンマド・スルターンに委ね、他の数部隊をその側面に配置した[ZNS : 123, ZNY : 217b]。5年戦役(1392-96)中の1393年のフェールス征服や1395年のジョチ・ウルス遠征でも2軍構成の中軍のうち非近衛の軍隊の指揮をムハンマド・スルターンに委ねた[ZNS : 133, 159, ZNY : 274a]。

ムハンマド・スルターンの異母弟ピール・ムハンマドは、1376年ジャハーンギールの死の40日後にヤサウル族のヒズル(またはイルヤース Ilyās)の娘バフト・マリク Baxt Malik から生まれたという[MA : 113b, ZNY : 156b, Tauer : 40]。したがって、母方でチンギス家の血統

を引いておらず、チンギス家の女性と結婚したわけでもなかった。しかし、クラヴィホによれば、テムルはこの孫をジャハーンギール同様にたいへん可愛がったという [ET : 182]。テムルのこの孫に対する信頼はジョチ・ウルス遠征中にシャルフとともに留守役としてマー・ワラー・アンナフルの統治を委ねたことからもうかがえる [ZNY : 209a]。1392年、5年戦役の直前に16歳の若さで「ガズニン、カーブルからシンドとカンダハール辺境までの(ガズナ朝の)スルターン・マフムード・ガズイー *Sultān Maḥmūd Gāzī* の諸国」の統治を委ねられ、カンダハールに赴いた [ZNY : 224a]。しかし、まもなくテムルの命でカンダハールから召喚され、以後5年戦役に従軍することになった [ZNY : 226b]。

2 後継者選定とアミーラーンシャーの反乱

5年戦役(1392-96)の成功によりテムルの支配地域は西アジア・南ロシアを含む東方イスラーム世界全域に拡大することになった。テムルはこの成果をふまえて1397年サマルカンドを帝都にふさわしく飾るためバグやマドラサなどの建設に着手した [閻野 1992 : 153]³⁰⁾。また、この年テムルは子孫に帝国の一部を所領として分け与えた。まず、1397年夏ごろ第4子シャルフに「ホラーサーン、スイースターン、フィールズクーフとレイまでのマーザンダラーン諸国の支配権 (*iyālat*)」を与えた [ZNY : 289b-290a]。孫のピール・ムハンマド b. ジャハーンギールにはガズナ朝のスルターン・マフムードの王国、すなわち「インド辺境に至るまでの、クンドゥズ、カーブル、ガズニン、カンダハールおよびそれらの周辺地域」をあらためて所領として与え [RGH : 43-4, ZNY : 295b]、あわせて北インド征服を命じた。1397年の大規模な建築活動と子孫への所領分与からは拡大した帝国の安定をめざすテムルの明確な意図をよみとることができる。一方、この年テムルはモグーリスターンのヒズル・ホージャ・ハンの娘テケルと結婚、同年末には孫のムハンマド・スルターンをモグーリスターンに派遣し、アシュバラに砦を建設して辺境の植民と開墾に従事するよう命じた [RGH : 45, ZNS : 170, ZNY : 295a, AM : 102-3]。したがって、他方で、テムルは東方への大規模な軍事行動となるべきホタン・カタイ遠征に備えていたのである。

テムルの孫ピール・ムハンマドは祖父より北インド征服を命じられていたが、パンジャーブ地方のムールターン *Mūltān* の包囲に大きく手間どっていた [加藤 1974 : 190-6]。そのため、テムルはホタン・カタイ遠征よりもピール・ムハンマドの支援を優先し、1398年3・4月ここに史上有名なインド遠征(1398-99)が開始されることになった [加藤 1974 : 197-201]³¹⁾。遠征にあたり、テムルは孫ウマル b. アミーラーンシャー(1383年生まれ)を留守役としてサマルカンドにおいた [ZNS : 210, ZNY : 345b]。母方を通じてチンギス家の血統を引くウマルが帝都の守備という大役を命じられた点は注目される。1398年12月20日、テムル軍はトゥグルク朝の都デリーを占領した。その時のこととして、

勅命に従い、フトバを当代の帝王(=スルターン・マフムード・ハン)の唱名、大アミール、テムル・キュレゲンと後継者 (*walī al-'ahd*) アミールザーデ・ムハンマド・スルターン

の名前で飾らせた。[RGH : 123-124, cf. ZNS : 192]³²⁾

これによれば、テムルは当時モグーリスタンにあってインド遠征に参加していない孫ムハンマド・スルターン(23歳)の名を自身の後継者としてフトバに読ませたというのである[cf. Woods 1984 : 333]。ムハンマド・スルターンは前年にモグーリスタン辺境に向かったが、後継者指名後に単独で辺境地帯に派遣されたとは考えにくい。それゆえ、後継者選定はインド遠征中におこなわれたとみるのが妥当であろう。ところで、イブン・アラブシャーはアゼルバイジャンを統治するアミーラーンシャーがインド遠征中の父テムルに送った書簡の内容を伝えるが、その中に次のような記述が見られる。

あなたは高齢ゆえに虚弱になり、あなたの体を衰弱が包んでいる。あなたは統治という儀式を催し、支配と統治という重荷を支えるには弱っている。なによりも、あなたには(死が)確かに訪れるまでモスクのすみに座り神を崇拝する敬虔な者が似つかわしい。あなたの子孫には、臣民や軍隊のことであなたを満足させ、くにとまちの保護を引き受ける者がいるのだから。あなたにくにとまちは必要なか。あなたはやがて亡くなるのに。
[AM : 174]

これによれば、アミーラーンシャーはこの書簡を通じて高齢から体の衰えがめだつ父テムル(インド遠征開始時62歳)に帝国を子孫のだれかに委譲するよう引退をせまったのである³³⁾。実際、インド遠征中のテムルは何度か腕の痛みを訴え、帰路には乗馬もできず、輿に乗ったほどであった[加藤 1971 : 236]。テムルは5年戦役により拡大した帝国の安定と自身の高齢を理由にインド遠征中の1398年に後継者を選定したものと思われる。

では、テムルは存命の息子たち(アミーラーンシャー、シャルフ)をさしおいて、なぜ孫のムハンマド・スルターンを後継者に選定したのであろうか。1398年当時、ムハンマド・スルターンは23歳、アミーラーンシャーより9歳若く、シャルフより1歳年長であった。AMに次のような興味深い記述が見られる。

彼女は王の娘の一人だったので、ハンザーデとよばれた。彼女にムハンマド・スルターンが生まれた。かれの高貴さ(nagābat)と幸運は証拠が明白だった。テムルはかれの品性に幸運の兆しを見、(かれは)高貴さで(他の)子孫にまさっていたので、(他の)すべて(の子孫)を蔑んでかれに目を向け、かれのおじたちが存命であったにもかかわらず、かれに(後継者を)委ねた。[AM : 82-3]

これによれば、ムハンマド・スルターンは母のジョチ系ソユン・ベグ(=ハンザーデ)に由来する高貴さの点でテムルの他の子孫よりもまさり、おじたち(テムルの息子たち)を差し置いて後継者に指名されたという。注目すべきは、テムルが母方の血筋を重視し、それが後継者を決定する根拠になった点である³⁴⁾。ソユン・ベグは母シェカル・ベグを通じてチンギス家(ジョチ系)の血統を引いていたから、母方を通じてチンギス家の血統を引いていることが後継者の要件として尊重されたものと思われる。

ところが、ムハンマド・スルターンの後継指名は帝国全体に大きな波紋を投げかけること

になった。というのも、テムルの第3子アミーラーンシャーがテムルに対して反乱を起こし、この反乱の平定活動が対西アジア7年戦役(1399-1404)へと発展したからである。アミーラーンシャーはテムル政権成立以前の1366年に生まれた庶子である。前述したように、1376年異母兄ジャハーンギールが亡くなると、1384年までにその寡婦ソユン・ベグとレヴィレイト婚をおこない、息子ハリール・スルターンと娘ベギ・スルターンをもうけた。この結婚により、アミーラーンシャーはジャハーンギールとソユン・ベグとのあいだの嫡長子ムハンマド・スルターンの義父にもなった。さらに、かれは1382年までにオゴデイ系オルン・スルターンと結婚してハン家と個人的な結びつきを強める一方、この女性とのあいだにアパー・バクル、ウマルの2子、クトルク・スルターンの1女をもうけた。こうして、アミーラーンシャーは1380年代前半までにチンギス家の2人の女性との結婚を通じてキュレゲンを名のることをテムルの子孫として初めて許された[Tauer : 56, MA : 121b]。

アミーラーンシャーは若冠14歳の1380年秋テムルよりカルト朝の支配するホラーサーンの総督職(hukūmat)を命じられた[ZNS : 81, ZNY : 164b, Cinq : 60]。ところが、5年戦役中の1393年6月テムルはかつての「フレグ・ハンの玉座(taxt-i Hülāgū Xān)」と征服したばかりの「アゼルバイジャン、レイ、ダルバンデ・バークー、シルワーン諸州、ギーラーン諸州からルームまで」をアミーラーンシャーに委ねてホラーサーンからの配置替えをおこなった[ZNS : 136, ZNY : 241a, 284a, Tauer : 129]。後述のように、テムルは1401年に後継者ムハンマド・スルターンに「フレグ・ハンの玉座」を委ねようとしたから、この時点ではアミーラーンシャーを後継者に考えていた可能性がある。1394年初め長兄ウマル・シャイフが戦死すると、テムルの存命の子孫のなかで最年長となった。1397年ごろには両イラク地方もその支配下におかれ、アミーラーンシャーの善政は西方の近隣諸国にまで届いていたという[Tauer : 146-7]。アミーラーンシャーが1394年10月と1396年6(7)月に発布した現存の2種の勅書には、冒頭の2行にトルコ語で「スルターン・マフムード・ハンの命令より。アミーラーンシャー・キュレゲン、我が言葉(Sultān Maḥmūd Xan yarığında / Amirānsāh Kūrāgān sözmüz)」なる定型句が見える[Fekete 1977 : 63-5]³⁵⁾。アミーラーンシャーはこの定型句において後継者としての正当な権利を主張しただけでなく、テムルの名が見えないことから、父テムルよりも妻の兄弟スルターン・マフムード・ハンを自身の権威の源とし、テムルからの自立を主張しているかのような印象さえ受ける[cf. Woods 1984 : 333, 335]。ところが、ヤズデーによれば、1396年夏アミーラーンシャーはホイ郊外で狩猟の際に落馬し、それ以来、精神に異常をきたし、亭楽と奇行・乱行が目立つようになったという[ZNY : 348a-349b]。被害は高貴なる妻ソユン・ベグにもおよび、夫から中傷をうけて激怒したソユン・ベグはタブリーズからサマルカンドへ向かい、インド遠征から帰還したばかりの義父テムルのもとに避難したという[ZNY : 349b-350a]。アミーラーンシャーが精神錯乱におちいった点についてはZNSを除くすべてのテムル朝史料に言及がある³⁶⁾。サマルカンドに戻ったソユン・ベグはアゼルバイジャン情勢についてテムルに次のように奏上した。

アミールザーデ・アミールーンシャーがそむきました(yāgī gasta ast)。財庫を掠奪しました。完全に陛下のおきて(yāsāq)を棄てました。もしこれにいち早く対策を講じなければ、国土は完全に(陛下の)手から離れるでしょう。[Tauer : 149]

このほかにもアミールーンシャーのテムルに対する反乱を明言する史料が存在する[B. 411 : 159a, ET : 114-6, cf. Woods 1984 : 334]。テムル朝年代記は反乱の原因をひとえにアミールーンシャーの精神錯乱に帰すが、インド遠征中の後継者選定, アミールーンシャーのテムルへの引退勧告, インド遠征中または直後のアミールーンシャーの反乱という三者の奇妙な時間的接近は, 反乱の背景にムハンマド・スルターンの後継指名があったことをうかがわせる。1398年の後継者選定の際にアミールーンシャーは32歳, 存命のテムル一族のなかで最年長だった。しかも, チンギス家の血統を引く2人の女性との結婚を通じてキュレゲンを誇り, ハン家との個人的な結びつきをも強めていた。アミールーンシャーにすれば, 自分をさしおいて, 23歳の義理の息子ムハンマド・スルターンが後継者に選定されたことに大きな不満を感じたとしても不思議ではない[Woods 1984 : 333]。

テムルはアミールーンシャーの反乱を知ると、「トゥーラーン・ザミーン」の支配のため, ムハンマド・スルターンをモグーリスタン辺境からよび戻してサマルカンドにおき, 代わりに15歳の孫イスカンドル b. ウマル・シャイフをアンドガンとその辺境の支配と防衛にあて[ZNY : 350b, Tauer : 152], 1399年9月アゼルバイジャンに向けて出発した³⁷⁾。アミールーンシャーは処刑を免れたもののアゼルバイジャン統治の任を解かれた[B. 411 : 159a, ET : 115]。7年戦役中の1401年3月, テムルはダマスクス郊外で「フレグ・ハンの玉座」を委ねるため後継者ムハンマド・スルターンをよび寄せた[ZNY : 387a]。同年11月ムハンマド・スルターンはアッラーン地方のカラバグでテムル軍に合流し[ZNS : 244, ZNY : 397ab, Tauer : 173]³⁸⁾, 以後7年戦役に従軍することになる。一方, ウマルはここでもテムルの信任を受け, ムハンマド・スルターンの代わりにサマルカンドに送られ, 再び帝都の留守役をつとめた[Aka 1986 : 2]。1402年9月ごろスルターン・マフムード・ハンがアナトリア遠征の途上病没すると, テムルはもはやチンギス家のハンをおこななかった。母方でチンギス家の血統を引くムハンマド・スルターンを後継者に指名した以上, ハンを必要としなかったのであろう。ところが, 1403年3月ムハンマド・スルターンは戦闘で受けた傷がもとでアナトリアのカラヒサル Qarā Hīṣār 郊外で29歳の若さで亡くなった[ZNS : 272-4, ZNY : 427a-428b, AM : 349, 352-3, 400]³⁹⁾。テムルの落胆はきわめて大きく, その悲しみは1年を経ても癒えなかったようである[ZNY : 448ab]。1403年11月テムルはサマルカンドから孫ウマルをよび寄せ, 1404年4月ムハンマド・スルターンの代わりに「フレグ・ハンのウルス」, すなわち「アゼルバイジャンの全諸国とその周辺地域, イスタンブルまでのルーム, エジプトまでのシリア」の統治(hukūmat)を委ねた[ZNS : 290-1, ZNY : 445b, 449b]。このように, テムルが再三にわたってウマルに重要な任務を委ねていることからすれば, かれがムハンマド・スルターン死後の有力な後継候補とみなされていた可能性も否定しがたい。

ムハンマド・スルターンの死からまる2年を経て、テムルは1405年2月のその死に際してムハンマド・スルターンの異母弟ピール・ムハンマドを後継者とするよう遺言した[ZNY : 472a, SH : 33a, 42b, AM : 400, 420]⁴⁰⁾。ハーフィズ・アブルーはテムルがピール・ムハンマドを第2の後継者に指名した理由を示唆する次のような記述を残している。

かれ(=ピール・ムハンマド)の御前にいたあるアミールたちは「年齢と権利(‘umr u rāh)でまさり、子孫のだれよりも年長であるがゆえに、アミール・サーヒブ・キラーン(=テムル)はピール・ムハンマドを自身の後継者(walī ‘ahd)にした。王座と王国はかれのものになるだろう。ハリール・スルターンはピール・ムハンマドに対して不満であり、ピール・ムハンマドに首長の権利(rāh-i āqā’i)を認めるのが不満なのだ。首長(āqā)だからといって、この言葉にどんな優越感を抱いても、反論の言葉があらゆる側から出る」と言っていた。[ZT : 98]

これによれば、テムルは最年長であるがゆえにピール・ムハンマドを後継者に選んだというのである。確かに、テムル没時ピール・ムハンマドは29歳、反乱を起こしたアミーラーンシャー(39歳)を除けば、存命のテムル一族のなかで最年長であった[ZNY : 491b]。しかし、後継指名の要件として年齢を重視するのは母方の血統を重視したムハンマド・スルターンの場合とは明らかに異なる。ピール・ムハンマドは母方を通じてチンギス家の血統を引く人物ではなかったから、テムルはその後継指名にあたり前例を踏襲しなかったことになる。母方を通じてチンギス家の血統を引くハリール・スルターンとしては、テムルが前例を踏襲せず非チンギス系のピール・ムハンマドをアカ(首長=帝国の指導者)としたその点にこそ不満を感じたのであろう。ピール・ムハンマドはテムルの死と遺言を知ると軍を率いてカンダハールからサマルカンドへ向かった[SH : 75a-78b, ZT : 54, MS-L : 32]。この時、かれはムハンマド・スルターンの未亡人チャガタイ系ハン・スルターンをめとるつもりだったという[SH : 76a]。おそらくは、ピール・ムハンマドはこのレヴィレイト婚を通じてムハンマド・スルターンと同様キュレゲンの称号を望んだものと思われる。

3 ハリール・スルターンとソユン・ベグ

1405年2月テムルがホタン・カタイ遠征の途上オトラルで病没すると、遠征軍の右翼を率いてタシュケントに駐屯していたハリール・スルターンはいち早くサマルカンドに入城して帝国の莫大な財産を接收し、帝都を守備するアミールたちの支持により権力を固めた。前述したように、ハリール・スルターンは1384年テムルの第3子アミーラーンシャーとジョチ系ソユン・ベグとのあいだに生まれ、母方を通じてチンギス家の血統を引く人物である⁴¹⁾。テムルの後継者ムハンマド・スルターンとは同母異父兄弟の関係にあり、テムルの第一夫人サライ・ムルクに養育された[MA : 126b, Tauer : 54]。1399年以後は母ソユン・ベグが反乱を起こしたアミーラーンシャーのもとから避難し、テムル宮廷で暮らすようになった。テムルはハリールの養母と生母を寵愛したから、この孫に対する期待も高まっていったものと思

われる。その一方で、ハリールの勇敢さはテムルの目にとまり、インド遠征では万人隊の指揮を委ねられるほどであった[ZNS : 191, 203, ZNY : 337b]。7年戦役にも従軍したが、1402年のアンカラの戦いの直後トルキスタン辺境の防衛を命じられ、アナトリアからマー・ワラー・アンナフルへ向かった[ZNY : 415b, cf. 459b]¹²⁹。1405年のホタン・カタイ遠征では遠征軍の主力である右翼の指揮を委ねられるほどテムルの信頼も増したが、遠征途上、重臣サイフッディーン Sayf al-Dīn の側室シャード・ムルク Šād Mulk¹³⁰を秘かにめとっていたことが発覚してテムルの逆鱗に触れるという大きな失点を犯した[ZNY : 467b-468a]。テムルが亡くなる直前のこの事件はテムルのこの孫に対する高い評価を傷つけ、引いてはこの孫が後継候補からはずれる原因になったように思われる。

ハリールは後継者に関するテムルの遺言を遵守せず、運と実力で帝国の実質的な権力を掌握した。一方で、ムハンマド・スルターンの遺児ムハンマド・ジャハーンギール Muḥammad Ġahāngīr をハンに推戴し、マー・ワラー・アンナフルでは貨幣とフトバにその名を刻ませたという[ZNY : 486b]。ムハンマド・ジャハーンギールはムハンマド・スルターンの非チンギス系の側室より生まれ[MA : 115b]、当時わずか9歳にすぎなかった[ZNY : 486b]。この措置はテムル家の者をハン位につけた点できわめて異例だが、テムルの亡き後継者で、自身の同母異父兄だったムハンマド・スルターンに配慮したものと思われる。ところで、クラヴィホはテムル没後の後継争いに関連して次のような興味深い記述を残している。

(ハリール・スルターンは)使者をその父アミーラーンシャー・ミールザー(miraxan miraza)に送り、「ただちにサマルカンド(samaricante)に来られれば、城と財宝を明け渡します。もし本当にあなたを迎えることになるなら、あなたは疑いもなくあなたの父(=テムル)と同じように統治者(señor)になるでしょう」と伝えさせた。(中略)(アミーラーンシャーが)必然的に統治者になるはずだった。しかし、ミールザー・アミーラーンシャーに送られたこの(ハリール)配下の者は「かれの妻ハンザーデ(ganzada)は(夫のもとから)テムル(tamurbeque)のもとに戻った。(彼女は)このハリール・スルターン(caril coltan)の母で、当時サマルカンドでかれの息子とともにあり、かれ(=アミーラーンシャー)がサマルカンドの帝位のあるじたること(el senori o de aquel imperio de Samaricante)を認めなかった」と言った。[ET : 230-1]

これによれば、ハリールは父アミーラーンシャーをテムルの後継者にするため使者を父のもとに送りサマルカンドへ来るよう要請したのに対し¹³¹、ハンザーデ(=ソユン・ベグ)は夫アミーラーンシャーの後継を認めなかったという。ソユン・ベグが自分を迫害した夫を嫌って息子ハリールを後継者にするべくテムル没後の後継問題に積極的に関与していた様子がかがわれる。また、クラヴィホはアミーラーンシャーが息子の求めに応じてサマルカンドへ向かい、ホラーサーンまで来たが、異母弟シャールフと息子ウマルの同盟を知って引き返したとも伝える[ET : 233]¹³²。少なくとも、アミーラーンシャーとハリールとのあいだに連絡・交渉があったことは間違いない。チンギス家の血統を引くソユン・ベグはテムルの2子

(ジャハーンギール、アミーラーンシャー)の正室という経歴を有し、息子ムハンマド・スルターンの後継指名により後継者の生母となったのも東の間、まもなく夫アミーラーンシャーの反乱と迫害、ムハンマド・スルターンの死という不幸に見舞われた。夫のもとを離れ、晩年のテムル宮廷に滞在したものの、テムルの死の直前に息子で有力な後継候補ハリール・スルターンが側室の問題でテムルの逆鱗に触れ、ピール・ムハンマドが後継者に指名されるという不遇を味わった。このように、テムル晩年にソユン・ベグがおかれた環境を考えるならば、彼女がジョチ家の血統を引く息子ハリール・スルターンによる後継と帝国の実権掌握を望んだとしても不思議ではない¹⁰⁾。

おわりに

チャガタイ・アミールたちの抗争時代にタルマシリン系、イエスン・テムル系、ガザン系(いずれもチャガタイ系)の3人の女性がそれぞれジャライル族、カラウナス族、タイチウト族、フットラーン・バルラス族のアミールたちに降嫁した。テムル家とチンギス家との姻戚関係はこの時代にはテムルの次子ジャハーンギールとチャガタイ系ルカイヤの一例にすぎなかったが、テムル政権時代になると、両家の姻戚関係は一挙に拡大し、チャガタイ系に加え、オゴデイ系、ジョチ系もその対象となった。それらはチンギス家女性がテムル家男性に降嫁する事例がほとんどであり、チンギス家男性がテムル家女性をめぐった事例はわずか1例にすぎない。テムルの4子(母はみな非チンギス系か)では、嫡出の次子ジャハーンギールが優遇され、ジョチ系ソユン・ベグと結婚した。4子全員がチンギス家の女性と結婚した結果、母方を通じてチンギス家の血統を引くテムル朝第3世代が多数登場し、テムルの子や孫の中にはテムル朝史の動向に大きな影響をあたえる者も現われた。テムルの第3子で、ソユン・ベグとオゴデイ系オルン・スルターンの夫アミーラーンシャーは母方の出自は低かったが、ハン家との結びつきを強め、1393年以降帝国の後継者を自認したものと思われる。1398年テムルは母方の血統を重視してジャハーンギールとソユン・ベグとのあいだの嫡長子ムハンマド・スルターン(1403年没)を後継者に選定した。その結果、アミーラーンシャーはテムルに対して反乱を起こし、7年戦役の直接的な原因をつくった。またアミーラーンシャーの2子で、ソユン・ベグの子ハリール・スルターンとオルン・スルターンの子ウマルは母方の血統にすぐれ、テムルの信頼を獲得したため、テムルの晩年に後継候補とみなされた可能性がある。しかし、テムルは1405年の死に際して母方の血統を重視する前例を踏襲せず、アミーラーンシャーを除く一族の最年長者ピール・ムハンマド(非チンギス系)を第2の後継者に指名した。この年齢重視の後継指名に不満を抱くハリールは、母ソユン・ベグの意向もあり、ピール・ムハンマドがカンダハールからサマルカンドに到着する前にいち早く帝国の実権を掌握し、実力でテムルの後継者となったのである。

テムル没後の4年余りの内訌を終息させて帝国の実権を掌握したテムルの第4子シャル

フ(在位 1409-47)は1397年以來の自身の本拠地ホラーサーンにとどまり、マー・ワラー・アンナフルの統治を嫡長子ウルグ・ベグに委ねた。ウルグ・ベグは1394年シャルフとタルハン族のガウハルシャード Gawharsād とのあいだに生まれ、サライー・ムルクに養育されたとされる。かれは1409年から40年間にわたりマー・ワラー・アンナフルを統治することになるが、その一方でテムル時代からかれがつくりあげた姻戚関係は注目に値する(系譜2)。まず、IIで触れたように、テムル在世中の1404年ウルグ・ベグは前年に亡くなったムハンマド・スルターンとチャガタイ系ハン・スルターンとのあいだの娘ウゲ・ベギ(1419年没)をめとった。次に、ハリール・スルターンと側室シャード・ムルクとのあいだの娘スルターン・バディー・アルムルク Sultān Badī' al-Mulk をウゲ・ベギの存命中にめとった[MA : 128b, 137bis-b]。第三に、これもIIで触れたように、オゴデイ系スルターン・マフムード・ハンの娘アーキラ・スルターンと結婚した。第四に、チャガタイ系シャムエ・ジャハーン・ハン Šam'i Ġahān の娘フスン・ネガール Ḥusn Nigār と結婚した[MA : 33b-34a, 137bis-b]⁷⁾。第五に、ジョチ系ダルウィーシュ・ハン Darwīs の娘シェカル・ビー Šikar Bī(またはシェカル・ベグ)と結婚した[MA : 26a, 137bis-b]。このように、ウルグ・ベグはチンギス家の3系統から一人ずつハンの娘を正室に迎えてキュレゲンを名のつたうえに、ジョチ系ソユン・ベグの2子、すなわちテムルの後継者ムハンマド・スルターンとテムル死後に帝国の実権を掌握したハリール・スルターンからも娘をめとった。したがって、ウルグ・ベグはまさにティムール政権時代に拡大したテムル家とチンギス家との姻戚関係を一身で体現し、テムルの後継者たちとの血縁的な結びつきを重視した人物だったのである。

注

- 1) 即位後、ダーニシュマンドチャの国事への欲求は強まったという[MTM : 113]。ダーニシュマンドチャー族のほか、チャガタイ・ウルスのハンに即位したオゴデイ系の人物として、1338-39年にイエスン・テムル・ハンに反乱を起こしてハン位を篡奪したアリー・スルターン 'Alī Sultān が挙げられる[Бартольд 1963 : 77, Oliver 1888 : 116]。
- 2) フサインはカーブルシャー Kābulshāh を理由もなく殺害して悪名を高めたため、新たに擁立したアーディル・スルターンがたえずフサインに対して蜂起する機会をうかがっていても、これを殺害することを望まず、いつも自制に努めていたという[MTM : 129]。
- 3) ソユルガトムシュは786(1384)年に死んだが、テムルはかれの特権とそれまでの忠誠を尊重してその後3年間かれの名でフトバと貨幣刻印をおこなわせた[MTM : 129-30, cf. Бартольд 1964a : 48]。
- 4) テムルはスルターン・マフムードの死後1年間はかれの名で勅令(yarlıg)を發布した[MTM : 130]。また、スルターン・マフムードにはアブー・サイード Abū Sa'īd なる息子がいたが、この人物がハンの称号を帯びた形跡はない[Бартольд 1964a : 98]。
- 5) たとえば、A.H. 752(1351-52)年に敢行されたカザガンのカルト朝へのヘラート遠征には、かれが擁立したチャガタイ系ブヤン・クリ・ハンも多くのチャガタイ・アミールたちとともに従軍していた

- [ZNY : 92b, Cinq : 41, cf. Aubin 1976 : 35]。
- 6) マンツは MA のセウインチ・クトルクの傍注[MA : 32a]に依拠してこのチャガタイ系女性がフサイン死後にフツラーン・バルラス族のケイ・ホスロウに降嫁したかのように主張するが、件の傍注にそのような記載はなく、明らかに女史の誤読である。
 - 7) この結婚はバルラス族が明らかに族外婚集団でないことを示す[Manz 1989 : 57]。
 - 8) ナフシャブはベルシア人の呼称。アラブ人はこれをナサフ Nasaf とよんだ[Le Strange 1905 : 470]。Naxsab-i Kis とも記され[ZNY : 149a], キシュ地方に属したことを示す。
 - 9) ナフシャブがエセン・ブカ・ハンやジンクシ・ハンの埋葬地となったこと[MTM : 109, 112]やタルマシリン・ハンがナフシャブで急死したこと[MTM : 111]もチャガタイ・ハンとナフシャブとの関わりを示す事実として注目してよい。
 - 10) ヤズディーによれば, 1392年ピール・ムハンマド b. ジャハーンギールがザープリスターンの統治を委任された際に与えられたアミールのなかにムーサーの息子 'Alī Ġāngī の名がみえる [ZNY : 224a]。そのニスバから, この人物はガンチの一人だったのであろう。ムーサー一族とガンチ集団との関わりをうかがわせる人物である。
 - 11) MA : 143aによれば, テュメンの親類アブドラー 'Abdallāh Ṭāyfi (Ṭāyḡū) がキョベキ・ハンのインジュ (ingū) のターイカーン族 (qawm-i Ṭāyqān) 出身であったという。この場合のインジュとは王家の私領で生活する人々 (私有民) をいう [Doerfer 1965 : 220-5]。注目すべきは, タイチウト族のムーサーの親類がキョベキ・ハンのインジュ (私有民) に属したという点である。ムーサーがハンの私有民ガンチ集団を所有した点とも関連して, ここにもタイチウト族とチャガタイ・ウルス王族との密接な関わりが認められる。なお, Ṭāyḡū一族については, Ando 1992 : 61-2参照。
 - 12) クラヴィホは「かれの他の妻は小夫人を意味する guichicano (guichicamo) とよばれ, tumariaga という王の娘で, その王は andoricoja という地方の王だった」[ET : 187]と記すが, この記述には混乱がある。tumariaga (= Tūmān Āga) は王の名でなく妻テュメンの名であり, guichicano もトルコ語の kŭčŭk xanım (= 小夫人) の音写であるから [Jahn 1974 : 520], kičik xānim とよばれた [MA : 33b] チャガタイ系テュケルに相当する。
 - 13) 1369年以前にウゲ・ベギはヤサウル族のアミール・アリー 'Alī と結婚していた [MTM : 281]。アリーについては, 川口 1988参照。1369年アリーがテムルのフサインに対する挙兵に反対して処刑されると [ZNS : 56, ZNY : 135b, MTM : 272, 281, Tauer : 27], その直後にウゲ・ベギはムハンマド・ベグと結婚したものと思われる。というのも, このころムーサーがフサイン側からテムル側に寝返ったため, 姻戚関係を結ぶことにより, テムルはこの有力者の確かな忠誠をえようとしたからである。その後, ウゲ・ベギはムハンマド・ベグとのあいだにスルターン・フサイン Sultān Ḥusayn をもうけ, 1381年に亡くなった [ZNY-T : 241-3, MTM : 312, Tauer : 46]。
 - 14) バルトリドはこの女性の名前をソウン・ベグとも, セヴィン・ベグともよぶ [Баргольд 1964a : 56, Баргольд 1964b : 437]。本稿では, ZNY : 148b と HN : 32aにしたがって, ソウン・ベグの表記を使用する。ただし, B. 411 : 159a では Sewinčbeg と表記される。また, Xānzāda は ZNS では Xwānzāda と表記される [ZNS : 67, 68, 276]。ドミニコ派のスルターニーヤ大司教ジャンは彼女を Conzada とよび, ハン (empereur) の家系の出身であることを記録する [Moranvillé 1894 : 14]。

- 15) イブン・バットゥータはこの人物の名前を NGTY と写し、ジョチ・ウルスのウズ・ベグ・ハンの第2夫人カバク・ハトン Kabak Xätün がかれの娘であること、かれが存命で痛風をわずらっていたこと、かれをウズ・ベグの宮廷で見たことを伝える [IB : 392-3, cf. DeWeese 1994 : 134-5, n. 158]。ナタンズイーはナングダイがウズ・ベグの筆頭アミール (amir al-umarā) であり [MTM-P : 303b], 太っていたこと、ベルディ・ベグ・ハン殺害後の騒乱のなかで殺された有力者の一人であったこと [MTM : 85-6, 98, cf. DeWeese 1994 : 134-5, n. 158] を伝える。ヒヴァ史料によれば、ナングダイはウズ・ベグをイスラームに改宗させたというサイド・アタ Sayyid Ata に帰依し、このサイドに同行してホラズムに行ったという [DeWeese 1994 : 103, 134-5]。トガンはホラズムにおけるナングダイの活動およびサイド・アタとの交流に触れる [Togan 1951 : 38]。
- 16) トガンは後世のヒヴァ史料にもとづいて両者を同一人物とみなしたが [Togan 1951 : 38], デウィースはテムル朝史料が1人の人物を2人に分けたのか、後世の史料が2人を1人に結びつけたのか明確でないとする [DeWeese 1994 : 102, n. 75]。
- 17) MA のテムルの条の正室リストの筆頭に「高貴なるハンザーデ (xānzāda pāk-nasab)」とみえるのは [MA : 96b], 彼女がテムル晩年の宮廷で暮らしたためであろう。
- 18) それによれば、ソユン・ベグは40歳くらいで、色白で、太っていたという。
- 19) トゥグディ・ベグに関するこのほかの記録としては、1389年におそらくはサマルカンドからソユン・ベグのいるヘラートに来たことが知られるだけである [Tauer : 92]。
- 20) クラヴィホの記述によれば、サライ・ムルクは金糸の刺繍入りの赤い絹でできた、裾が地面に達するほど長い、袖のない、腰回りのない、裾広がり の 礼 服 を 着 て お り、顔 全 体 に 白 粉 を 塗 っ て 日 差 し か ら 顔 を 守 り、顔 に 薄 い ヴェール を 垂 ら し て い た。さ ら に、ふ ち の 一 部 は 肩 ま で 垂 れ 下 り、宝 石 で 飾 ら れ、縁 を 金 糸 で 刺 繍 し、金 の 花 輪 ・ 枠 組 み ・ 羽 毛 を つ け た、赤 い 布 の 頭 飾 り を つ け、黒 毛 の 髪 を 結 わ ず に 肩 ま で 垂 ら し て い た と い う。ま た、ク ラ ヴ ィ ホ は 彼 女 に 仕 え る 者 が 300 人 い た と も 伝 え る。
- 21) バルトリドはこの称号がテムルを他のアミールたちよりも優位にしたと述べるが [Бартольд 1963 : 153], ケイ・ホスロウ、パフラム、ムサーといった有力なチャガタイ・アミールたちもチンギス家の女性と結婚して「チンギス家の女婿」の地位を獲得した以上、バルトリド説には賛同しかねる。
- 22) 1399年インド遠征から帰還した際に、テムルはこのバークを訪れているから [ZNS : 211, ZNY : 346a], 建設開始はそれ以前ということになる。テムルが女性たちのためにサマルカンド郊外につくらせたバークについては、Бартольд 1964a : 53-4を参照。
- 23) MA の系譜を復元すると, Malikat b. Xiḍr b. Biktīmūr b. Hindū b. Biktīmūr b. Barāq と なる。1375 年テムルは庶長子ウマル・シャイフをフェルガナ地方の中心アンドガーンの統治のために派遣した [ZNY : 154b]。ウマル・シャイフはアンドガーン赴任後この地方にいたマリカトと結婚したものと 思 わ れ る。
- 24) MA ではブヤン・クリ・ハンの息子でハン・スルタンの父にあたる人物は, Sultān Malik と も [MA : 33a], Muḥammad Ūḡlān [MA : 114b] と も 記 さ れ る。
- 25) SH にもムハンマド・スルタン・キュレゲンの表記が見える [SH : 14b-15a, 173a]。
- 26) テムルは8男9女をもうけたが、子孫を残した4子のうち、次子ジャハーンギールを除く3子の母は側室出身である [MA : 97ab, 99b-100a]。長子ウマル・シャイフの母は Tūlūq [MA : 97b], Tūmān

- [MA : 99b], Tūmalūn [B. 411 : 159a, HS Ⅲ : 542]と史料により異同があり, 出自も不明である。第3子アミーラーンシャーの母も ŠNKL [MA : 97b, 100a], Mingliġik [MA : 99b], Mingliċa [B. 411 : 159a], Mingli Beg [HS Ⅲ : 542]と史料により異なり, 出自もオイラト系 Ġawni Qurbāni 族とするもの [HS Ⅲ : 542], 家内奴隷 (duxtār-xāna) とするもの [MA : 99b, 100a] がある。第4子シャルフの母がカラ・キタイ族の Taġāy Tarkān であることは諸史料ほぼ一致している [MA : 97a, 99b, 100a, HS Ⅲ : 542, B. 411 : 159a]。
- 27) ジャハーンギールをテムルの長子とする記録がある [MA : 99b, ET : 182]。MA ではウマル・シャイフとその子孫の系譜に続いてジャハーンギールとその子孫を並べるといふ配列になっており, 上の記録と矛盾する。ここはやはり年代記から算定されるウマル・シャイフとジャハーンギールの生年にしたがって, 前者を長子, 後者を次子とする [cf. Бартольд 1964a : 40]。
- 28) この遠征でジャハーンギールはチャガタイ・ウルスのドクラト族有力者シャムスッディーン Šams al-Dīn の娘デルシャード Dilsād をテムルに献上した。まもなく, テムルはデルシャードと結婚してこれを正室とした [MA : 96b]。
- 29) テムルの姉 [ZNY.T : 244]。ドクラト族出身の2人の人物スルターン Sulṭān, ダーウード Dā'ūd に降嫁した [MA : 95b]。1362年ごろトゥグルク・テムル・ハンに追われたテムルをサマルカンドでかくまったため, テムルはこの姉を大切に, 1382年に亡くなるまで彼女は宮廷で重要な役割を果たしたという [Бартольд 1964a : 41, Jahn, 1974 : 517]。クトルグ・テルケンは1372年に亡くなった娘シャード・ムルク Šād Mulk のためにサマルカンド郊外シャーヘ・ゼンデ Šāh-i zinda に廟をつくらせた [Golombek & Wilber 1988 : 238-40]。1382年に亡くなったクトルグ・テルケンもこの廟に埋葬され, テムルはたびたびこの廟を訪れたという [Jahn 1974 : 517-8]。
- 30) 間野 1992 : 152-4は1397年の活動を含むテムルの建築活動の全体像を俯瞰する。
- 31) インド遠征の詳細な経過・経路・目的については, 加藤 1974 : 201-240参照。
- 32) ZNY のこの記事に相当する部分 [ZNY 325a] には, フトバをテムルのラカブと名で飾ったとしか記されておらず, スルターン・マフムード・ハンやムハンマド・スルターンの名は見えない。ヤズディーは明らかにギヤースッディーンやシャーミーの記述を書きかえており, 作為を感じざるをえない。シャルフ系の宮廷史家であるヤズディーは ZNY において後継者を意味する walī 'ahd や qā'im-maqām の語をなぜかムハンマド・スルターンには使わず, ピール・ムハンマドに多用する [ZNY : 472a, 474b, 477a, etc.]。
- 33) 書簡全体が尊大な調子で書かれ, テムルはこれを受けると, アミーラーンシャーの懲罰のためタブリーズに向かったという [AM : 177]。テムルはインド遠征からただちにアゼルバイジャンに進軍したわけではなく, 1399年1月1日にインドからの帰路についてテムルは往路の半分の約4ヵ月でサマルカンドに凱旋し (同年4月29日), それからわずか4ヵ月半後の同年9月10日アミーラーンシャーの懲罰のためアゼルバイジャンに向かった。バルトリドはイブン・アラブシャーのこの話をまったくありえないことだとするが [Бартольд 1964a : 56, n. 139], その根拠を示していない。
- 34) ウズはムハンマド・スルターンの後継指名には母の身分が低いアミーラーンシャーとシャルフに対するテムルの過小評価があったとする [Woods 1990 : 112-3]。
- 35) 1394年発布の勅書の定型句では, 第1行目にスルターン・マフムード・ハンの名前が抬頭し, 第2

行目にアミーラーンシャーの名前がスルターン・マフムードよりやや低い位置にやはり抬頭していることがわかる。また、アミールやアミールザーデの称号をその名に冠さず、誇らしげにキュレゲンを名のあとに付している。これらは明らかにアミーラーンシャーのスルターン・マフムードへの敬意のあらわれと見てよからう。

- 36) ハーフイズ・アブルーとナタンズイーはアミーラーンシャーがテムルのインド遠征のあいだにタブリーズのマランド Maland 草原で狩猟の際に落馬したと述べ [Tauer : 147-9, MTM : 372-3], ヤズディーとは落馬した時期や場所が異なる。ZNS だけがアミーラーンシャーの精神錯乱にまったく言及しないが、ウッズはその理由をシャーミーが ZNS の 2 種の改訂版の一つをアミーラーンシャーの息子ウマルに献呈したからであるとする [Woods 1984 : 334]。クラヴィホによれば、アミーラーンシャーはタブリーズに住むようになると、思いつきから家屋、モスク、大きな建造物を破壊するよう命じたという [ET : 114-5]。これらの記録から、アミーラーンシャーが少なくともインド遠征前後に極度の精神不安定の状況にあったことは間違いない。バルトリドとウッズはアミーラーンシャーの精神錯乱に懐疑的な見解を提出している [Бартольд 1964a : 57, Woods 1984 : 335]。
- 37) 1399-1401年にサマルカンドの留守役だったムハンマド・スルターンはマドラサと付設のハーンカーの建設を始めた [ZNY : 457ab, 484b, cf. AM : 349, 408, 481]。これはかれがテムルより帝都での建築活動を許されていたことを示し、かれが1398年に後継者に指名されたことと無縁ではなからう。1404年に7年戦役から帰還したテムルは件のハーンカーの正面に亡きムハンマド・スルターンの墓廟の建設を命じた [ZNY : 457b]。その結果、グーレ・アミール Gūr-i amīr とよばれる一大コンプレックスが出現した [Бартольд 1964b : 437-8, Golombek & Wilber 1988 : 260-3]。一方、ヤズディーによれば、帝都の留守役だったムハンマド・スルターンは独断でモグーリスターン遠征をおこなったイスカンドル (1397年にソユン・ベグとアミーラーンシャーとのあいだの娘ベギ・スルターンと結婚) を捕らえ、1401年11月カラバグのテムルのもとに連行した [ZNY : 354ab, 398a]。その結果、イスカンドルは大法廷 (dīwān-i buzurg) の審問により答刑に処された [ZNY : 398a]。
- 38) シャーミーはムハンマド・スルターンの名の前に「最も偉大・公正・寛大なアミールザーデ、勇氣と威厳を包む顔、神の純粋な影、根源と支柱の精華、(神の)慈悲深い恩寵により特別な時代の後継者 (walī al-'ahd fī al-zamān al-maxṣūṣ ba-'ināyat al-rahmān)」という長い形容句をおく。ZNY と Tauer によれば、ムハンマド・スルターンがカラバグに近づく、テムルは王族から2子アミーラーンシャーとシャルフ、孫のピール・ムハンマド b. ジャハーンギール、スルターン・フサイン、アバー・バクル、ハリール・スルターン、アフマド Aḥmad、アミールからはスライマーンシャー Sulāymānsāh、ジャハーンシャー Ġahānsāh という錚々たる顔触れでかれを出迎えさせた。テムルがムハンマド・スルターンを自身の後継者としていかに尊重していたかがわかる。また、ムハンマド・スルターンがカラバグに来る直前の1401年10月17日付けの勅書の冒頭定型句には「スルターン・マフムード・ハンの命令より。アミール・テムル・キュレゲンの言葉より。ムハンマド・スルターン・バハードゥル、我が言葉」とあり、ムハンマド・スルターンが後継者であることを反映した表現になっている [Woods 1984 : 333]。
- 39) シャーミーはムハンマド・スルターンの死の記述に1章を割く [ZNS : 272-4]。ヤズディーは2章にわたりその死、追悼の儀式、ソユン・ベグやテムル一族の様子を詳細に伝える [Бартольд 1964b

- : 436-7]。
- 40) 1404年にピール・ムハンマドに会ったクラヴィホはかれがテムルの後継者に任命されたことに言及しない[Бартольд 1964a : 76, n. 105]。
- 41) かれはチンギス家の女性と結婚しなかった。1397年に13歳でテムルの妹シーリーン・ベグ Širin Beg とアルラト族アリー・Alī とのあいだの娘ジャハーン・スルターン Ğahān Sulṭān をめとったが[ZNY : 467b, Tauer : 136, MA : 126b], この女性がただ一人の正室であった。
- 42) MTM : 380にはウマルがサマルカンドの統治を命じられたとき、ハリールはサマルカンドにいたと記され、ヤズディーの記述と矛盾する[Бартольд 1964a : 70, n. 59]。
- 43) イブン・アラブシャーによれば、シャード・ムルクはハリール・スルターンのために大王妃(al-malikāt al-kubrā)と小王妃(al-malikāt al-ṣuġrā), すなわちサライー・ムルクとテュケルを恐れて毒をもったという[AM : 466, cf. Бартольд 1964a : 87]。その真偽はともかく、シャード・ムルクとテムルの正室たちとの関係をうかがわせる逸話である。
- 44) イブン・アラブシャーはハリール・スルターンがピール・ムハンマドに対して自分やピール・ムハンマドよりも父アミーラーンシャーや叔父シャルフに帝国の継承権があり、両者に帝国が二分されるよう主張したことを伝える[AM : 421]。
- 45) シャールフ系の年代記はクラヴィホとはやや異なる記述を残す。ZT はテムル没後の1405年夏ごろアミーラーンシャーがウマルを恐れて逃走し、ホラーサーン支配をめざしてホラーサーンとアスタラーバード国境の Kālpūs まで達したものの、シャルフが大軍を派遣して帰国をうながしたため引き返したとする[ZT : 42, 55, 57-8, 63]。MS もほぼ同内容だが、シャルフがアミーラーンシャーを完全武装させてウマルに派遣したと伝える[MS-L : 51, 54]。SH はアミーラーンシャーがハリール・スルターンの要請でホラーサーンを混乱におとしいれるため同地方に来たと記述する[SH : 64b]。
- 46) ソユン・ベグの影響かどうかはともかく、ハリール・スルターンにはジョチ系との関わりを示す要素が濃厚に認められる。たとえば、フサイン b. アリーシャーなる人物によりハリール政権時代に作成されたと思われる、チンギス朝の系譜とテムル朝の系譜を合わせた一系譜は両王朝(ジョチ家とテムル家)をつなぐ唯一の人物としてハリールを肖像つきで示す[HN : 32a, 33a]。またハリール宮廷にはトクマク(=ジョチ・ウルス)出身の側室がいたことが知られる[MA : 128b]。さらに、ジョチ・ウルスの王族出身者がハリール宮廷に亡命者として身を寄せていたことも知られる[安藤 1994 : 4-6]。
- 47) MA : 33b-34a ではフスン・ネガールは Šābb-i Ğahān b. Xidr Xwāga の娘とされる。しかし、ハニケの異名が示すように、この女性はハンの娘であったと推定されるから、ハンに即位していない Šābb-i Ğahān よりもハンに即位した Šam'i Ğahān の娘と考えたい。バルトリドがフスン・ネガールをハリール・スルターンの娘とするのは明らかな誤りである[Бартольд 1964a : 144]。

参考文献

- AM : Ibn 'Arabšāh, *'Aġā'ib al-Maqdūr fī Axbār Tīmūr*. Cairo, 1407.
- B. 411 : Mu'in al-Din Naṭanzī, *Synoptic Account of the House of Timur*, MS., Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, B. 411, 159a.

- Cinq : Ḥāfiẓ Abrū, *Cinq opuscules de Ḥāfiẓ-i Abrū concernant l'histoire de l'Iran au temps de Tamerlan*, ed. F.Tauer, Prague, 1959.
- ET : Ruy González de Clavijo, *Embajada a Tamorlán*, ed. F.L.Estrada, Madrid, 1943.
- HN : Ḥusayn b. 'Alīšāh, *Nasab-nāma*, MS., Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Hazine 2152.
- HS : Xwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar*, III, IV, ed. D.Siyāqī, Tehran, 1362.
- IB : Ibn Baṭṭūṭa, *Voyages d'Ibn Batoutah*, par C.Defrémery et B.R.Sanguinetti, III, Paris, 1949.
- MA : Anonymous, *Mu'izz al-Ansāb*, MS., Paris, Bibliothèque Nationale, Ancien Fonds, Persan 67.
- MF : Faṣīḥ Aḥmad Xwāfī, *Muğmal-i Faṣīḥī*, ed. M.Farrux, Mašhad, 1339.
- MS-L : 'Abd al-Razzāq Samarqandī, *Maḥla'-i Sa'dayn wa Mağma'-i Baḥrayn*, ed. M.Šafi', II-1, 1-620, Lahore, 1360.
- MS-T : 'Abd al-Razzāq Samarqandī, *Maḥla'-i Sa'dayn wa Mağma'-i Baḥrayn*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī, Tehran, 1353.
- MTM : Mu'in al-Dīn Naṭanzī, *Muntaxab al-Tawāriḫ-i Mu'inī*, ed. J.Aubin, Tehran, 1957.
- MTM-P : Mu'in al-Dīn Naṭanzī, *Muntaxab al-Tawāriḫ-i Mu'inī*, MS. Paris, Bibliothèque Nationale, Supplément, Persan 1651.
- RGH : Ġiyāt al-Dīn 'Alī Yazdī, *Rūznāma-yi Ġazawāt-i Hindūstān*, Пзд. Л.А. Зимин, Петроград, 1915.
- SH : Tāğ al-Salmānī, *Šams al-Ḥusn*, ed. H.R. Roemer, Wiesbaden, 1956.
- Tauer : *Histoire des conquêtes de Tamerlan intitulée Zafarnāma par Nizāmuddīn Šāmī avec des additions empruntées au Zubdatu-t-tawāriḫ-i Bāysunğurī de Ḥāfiẓ-i Abrū*, Tome II, Praha, 1956.
- ZNS : Nizām al-Dīn Šāmī, *Histoire des conquêtes de Tamerlan intitulée Zafarnāma par Nizāmuddīn Šāmī avec des additions empruntées au Zubdatu-t-tawāriḫ-i Bāysunğurī de Ḥāfiẓ-i Abrū*, Tome I, Praha, 1937.
- ZNY : Šaraf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Zafar-nāma*, ed. A. Urunbayev, Tashkent, 1972.
- ZNY-T : Šaraf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Zafar-nāma*, I, ed. M.'Abbāsī, Tehran, 1336.
- ZT : Ḥāfiẓ Abrū, *Zubdat al-Tawāriḫ*, ed. Sayyid H.S. Kamāl Ḥāğğ Sayyid Ġawādī, Tehran, 1372.
- Aka, I. (1986) Timur'un Ankara Savaşı (1402) Fetihnāmesi. *Belgeler* 11, 1-22.
- Ando, S. (1992) *Timuridische Emire nach dem Mu'izz al-ansāb: Untersuchung zur Stammesaristokratie Zentralasiens im 14. und 15. Jahrhundert*, Berlin.
- Aubin, J. (1976) Le Khanat de Čağatai et le Khorassan (1334-1380). *Turcica* 8(2), 16-60.
- DeWeese, D. (1994) *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania.
- Doerfer, G. (1963) *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, I, Wiesbaden.
- Fekete, L. (1977) *Einführung in die persische Paläographie, 101 persische Dokumente*, ed. G.Hazai, Budapest.
- Golombek, L. & D. Wilber. (1988) *The Timurid Architecture of Iran and Turan*, I, Princeton.
- Jahn, K. (1974) Timur und die Frauen, *Anzeiger der Österreichischen Akademie der Wissenschaften (Philosophisch-Historische Klasse)*, 3(24), 515-529.

- Le Strange, G. (1905) *The Lands of the Eastern Caliphate*, Cambridge.
- Le Strange, G. (1928) *Clavijo, Embassy to Tamerlane*, London.
- Manz, B.F. (1989) *The Rise and Rule of Tamerlane*, Cambridge.
- Moranvillé, H. (1894) Mémoire sur Tamerlan et sa cour par un Dominicain, en 1403, *Bibliothèque de l'École des Chartes*, tome LV, pp. 1-32.
- Oliver, E.E. (1888) Chaghatāi Mughals. *JRAS* 20, 72-128.
- Sertkaya, O.F. (1979-80) Timürlü Şeceresi. *Sanat Tarihi Yıllığı*, 9-10, 241-258.
- Togan, N. (1973) Temür zamanında aristokrat Türk kadını, *İslâm Tetkikleri Enstitüsü Dergisi* 5, 3-14.
- Togan, Z. V. (1951) *Horezmce Tercümesi Muqaddimat al-Adab*, Istanbul.
- Woods, J.E. (1984) Turco-Iranica II: Notes on a Timurid Decree of 1396/798. *JNES* 43 (4), 331-337.
- Woods, J.E. (1990a) Timur's Genealogy. *Intellectual Studies on Islam, Essays in Honor of Martin B. Dickson*, eds Michel M. Mazzaoui and Vera B. Moreen, 85-125. Salt Lake City.
- Woods, J.E. (1990b) The Timurid Dynasty. *Papers on Inner Asia* 14.
- Бартольд В.В. (1963) Очерк истории Семиречья. *Сочинения* 2 (1), Москва, 23-106.
- Бартольд В.В. (1964a) Улугбек и его время. *Сочинения* 2 (2), Москва, 25-196.
- Бартольд В.В. (1964b) О погребении Тимура. *Сочинения* 2 (2), Москва, 423-454.
- 安藤志朗 (1994) ティムール朝国制——Diez A.Fol. 74 未完成ミニアチュールより——『東方学』87, 119-135.
- 加藤和秀 (1974) ティムールのインド遠征 尚樹啓太郎 (編) 『歴史における文明の諸相』東海大学出版会, 171-240.
- 川口琢司 (1988) Timür とチャガタイ・アミール達 『東洋学報』69 (3・4), 83-119.
- 間野英二 (1976) アミール・ティムール・キュレゲン——ティムール家の系譜とティムールの立場——『東洋史研究』34-4, 109-133.
- 間野英二 (1983) 『バーブル・ナーマ』の研究 (I) 「フェルガーナ章」日本語訳 『京都大学文学部研究紀要』22, 189-347.
- 間野英二 (1992) サマルカンド (ティムール帝国) 板垣雄三・後藤明 (編) 『事典イスラームの都市性』, 152-154.

(財団法人東洋文庫)